

3 章 一緒に座る

／公園ベンチのアフォーダンス

3－1 公園の東屋

3－2 街の休憩所2例

3－3 居心地のいい共有／アリスガーデンの事例



公園の東屋（ママ友はどこに？）

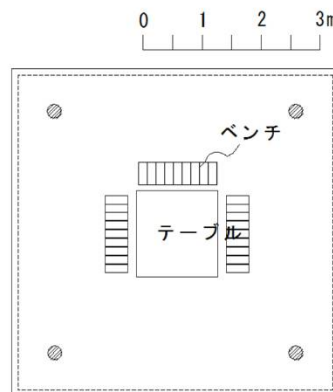
基本的に一人で座る＜道端のベンチ＞とは別に、一緒に座る＜街のベンチ＞が、市街地の小公園や休憩所に見られる。＜街のベンチ＞については、ボタンランゲージには次のような記載がある。

PL_69 公共戸外室 Public Outdoor Room

・・・このような市民活動の偶発性と多様性に対応するには、＜明確であっても明確過ぎない＞といった微妙な空間が必要になる－としてアレクザンダーは、すべてのサービスが有料化された計算高い都市空間における、屋根と柱からなるあずまや（東屋）風小スペースの存在価値を説いている。

本章の筆者は、＜街のベンチ＞で見られる好ましい市民活動を観察し、ベンチの置き方によってアフォーダンス（利用可能性）が左右される－との仮説を立てて、法則性の解明を試みている。

3－1 公園の東屋



広島市内の公園にはよく見られる東屋、正方形のテーブルをコの字に囲むベンチ（背当ては省略されている）が備わっている。東屋のすぐ脇では3人の子育てママのグループが、ビニールシートの上で食事をしていた。

さて、この人たちはなぜベンチに座らないのだろうか。自分たちが座ったら他の人が座りにくくなると遠慮しているのだろうか。もしかしたら、他の人が座ったら今度は自分たちが座りにくくなると深読みしているのではないだろうか。このベンチレイアウトは、親密さを演出しているがゆえに、誰かが利用していたら他のものが利用できない（共有できない）、つまり誰かによって[専有される場所]になっている。東屋のデザインも、案外むつかしいものである。

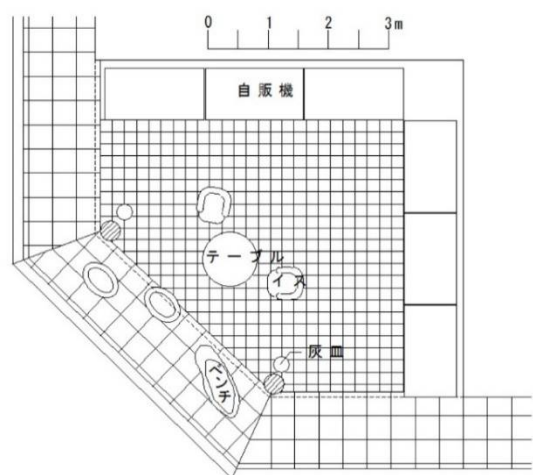
人が環境から受ける影響を情報理論の視点から研究する学術分野に認知科学

(cognitive science) がある。ジェームス・ギブソンは、情報は環境の中に実在するとし（だから客観的な研究対象になり得る）、ギブソンはこの種の情報に対して「与え得る、余裕がある」という意味の英語 afford を引用して affordance アフォーダンス（利用可能性）なる造語を与えた（ウィキペディア）。アフォーダンスが意味する情報は、目の前の危険や食べ物の情報よりも高次の、より習慣化された情報を指す（アフォーダンスとは、環境が動物に提供する意味（＝価値）であり、動物にとっての環境の性質である（アフォーダンス・新しい認知の理論 佐々木正人著 岩波書店 1994））。

ここに取り上げた＜東屋のベンチ＞を利用する人は、＜共有できるアフォーダンス＞あるいは＜専有できるアフォーダンス＞を、環境の中に知覚している。さらに公共空間では、＜そもそも座れるかどうか＞＜自分が今座れるかどうか＞という情報を環境から知覚する。生態学的認識論によれば、前者の価値は「構造不変項」、後者の価値は「変形不変項」になる。この東屋ではベンチが設けられていて、＜そもそも座れる＞場所であることを恒常的な価値として知覚できる。また、＜自分が今座れるかどうか＞というアフォーダンスの知覚は、人によって異なる。佐々木正人によると、この情報は知覚者の主観が構成するものではなく、環境の中に実在する情報であるという。ここにあげた東屋の例は、来たけれども座らないという「変形不変項」がなせる事態なのであろう。それは何か一実に微妙な課題である。ともかく、この東屋が＜必ず共有される場所＞になるには、にわか雨か夏の強い日差しの後押しが必要なようである。

3-2 街の休憩所 2 例

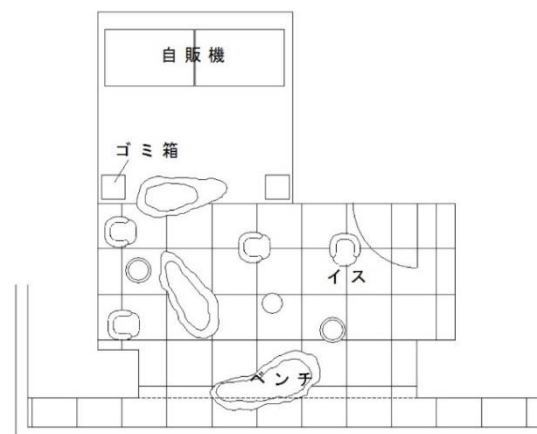
ケース 1 グランドパーキング 2 1 の休憩所



ここはパーキングビルの角に設けられた公開空地風の自販機パーク、ずらりと並んだ自動販売機に付随して、ゴミ箱、テーブル、ベンチ、イス、灰皿が備えてある。前面道路は人通りも多く、昼ときには利用者が途切れることはない。喫煙はもとより缶コーヒーを飲み、スマートフォンを操作し、弁当を食べる人もいる。お互いの視線を避けながら、座っていたり立っていたり、お互いに譲り合い我慢し合いながら、この場所を共有している。

座っている人は視線を合わせないように、向きを意図的にずらしている。帽子の男性は、弁当をその場で食べ終わり通りを眺めているが、そのほかの3人はスマートフォンを個々に操作している。前の石のベンチが空いているにもかかわらず立っている女性は、他の4人より目線が高く保ち、いつでもポジションを変えられる状態を作りながら、タバコを吸っている

ケース2 グランドビル大手町の休憩所



中央に座っている男性は、他の人が来る前からその場所に座っていた。手前に立っている3人グループは、石のベンチがないスペースに集まっている。ジャケットの男性は、3人と向き合わないよう姿勢を傾け目線をそらしている。さらに一番奥の男性は石のベンチが空いているにもかかわらず、立ったまま壁に向かってスマートフォンを操作している。都会のジャングルに生きる住人たちのマナーである。

次章で取りあげる〈大テーブルを囲んで食事を摂るレストラン〉、先述した公園の東屋、そして半屋外の休憩所を並べて比較すると、そこには微妙な〈居方〉の違いがみられる。レストランでは〈居方〉に制約があるものの、空いている席に思い思いに座れる〔居心地のいい共有関係〕がある。しかし公園内の東屋は、他人同士一緒に座れない

〔専有された空間〕である。

半屋外の休憩所では、思い思いに自分の＜居方＞ができるので先に居る人に声を掛けなくても済んでいるが、明らかに先に居る人後から来た人を意識し、自分の居方を決めながら座っている。つまり〔受容し譲り合う共有〕が生まれている。

レストラン（次章）では、相席が嫌なら4人掛けテーブルや2人掛けテーブルが空くの待つことができる。にもかかわらずいつも大テーブル席は埋まる。人と人の＜ふれあい involvement＞の感覚がそこにあると思わずにはいられない。

このことを検証するために、更に類似の＜居場所＞を訪れてリアルな情報を現場で探索し、利用者の知覚しているアフォーダンスを明らかにしてみたい。

P.S. 文中、ごく自然に＜居場所＞＜居方＞＜居心地＞というふだん言葉を多用してしまった。研究ノート「都市のインテリア」が目指すものは、公共空間におけるこれら環境の質に係るアフォーダンスの解明と開発ではないだろうか。

3－3 居心地のいい共有／アリスガーデンの事例

たまたま通りかかった市民が＜一緒に座れる場所＞には、利用者が環境の中に知覚している〔場所を共有できるアフォーダンス〕が備わっているはず。それはどのようなものか、どこで見つかるのか。座れる場所を共有するという共通感覚に何が影響しているのか、＜一緒に座る＞行為を可能にしている条件は何か。

広島県の都心部にある事例を通して考えてみよう。

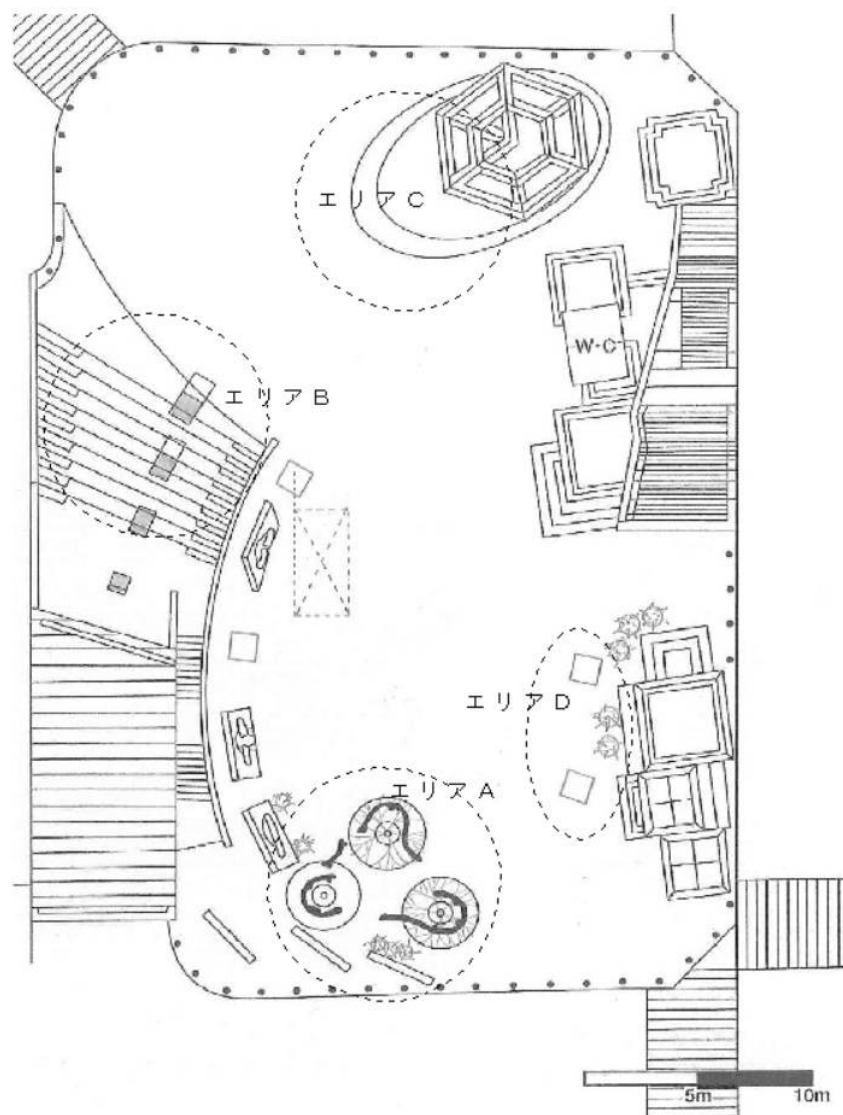
ケース1 アリスガーデン エリアB



アリスガーデン

広島市市街地の中央部、東西 600mの本通り商店街の東端繁華街の中にある、広島市が開設するイベント広場である。なお本通りの西端は平和公園である。

広場の面積は東西 31m、南北 44m、約 1,500 m²である。広場内にアリスカフェがあるほか、オブジェ前方の曲線部分は、イベント時にはステージとして利用することができ、その際には西側にある階段が約 100 人の客席として利用される。イベント開催者の便宜のために、この平面図が配布されている（エリアの記入は筆者）。



コンクリートの階段状のベンチで段差（蹴上高さ）は高く、座面は広い。周囲を見渡せて、周りからも目立つので晴れやかな印象がありながら、両側が壁で囲まれ、中央部には4本の四角柱が列柱状に配置されて適度に見通しを遮り、それが効果を発揮して意外と落ち着く印象がある。若年女性のグループが比較的多いが、利用者の属性に極端な偏りはない。見られる行為は、休息、飲食、スマホ、会話、喫煙（実は禁煙区域）と様々だが、しっかり休息をとるという共通の行為が見られる。利用者相互の距離は少し広い。各グループの滞在時間は長い。舞台に対しては観客席なので、視界はほぼ正面一方向で見下ろす。座面が広いためか、体を横たえてリラックスしている姿が見られた。[居心地のいい共有]の事例である。

ケース2 アリスガーデン エリアD

エリアDは、コンクリート製の一边が1mほどの正方形のベンチが設置されている。相対する辺に他人同士が物理的には座れるが、一人または仲間だけで座らない。広場内を縦断する通路の脇。周囲を見渡せ、周りからも目立つので晴れやかな印象がある。

個人・グループの利用者が見られ目立った偏りはない。行為は、休息、飲食、スマホ、会話と様々だが、なんとなく当座の時間を費やすという共通の行為が見られる。

先客が居ると座りにくい[専有]の事例である。



ケース3 アリスガーデン エリアA, C

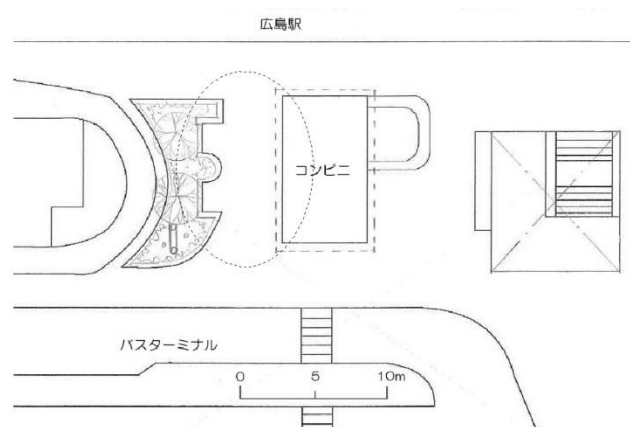


エリアAは、ステンレスパイプのうねったベンチが設置されている。広場内を縦断する通路の脇。長時間座るにはお尻が痛くなり不安定さがあり適さない。木陰があり少し親密さが感じられる。

エリアCは、コンクリートの楕円状の基壇で段差は低く腰膝をしっかり曲げて座る。周囲を見渡せて、周りからも目立つので晴れやかな印象がある。

どちらのエリアも個人・グループの利用者が見られ目立った偏りはない。行為は、休息、飲食、スマホ、会話、喫煙（実は禁煙区域）と様々だが、なんとなく当座の時間を費やすという共通の行為が見られる。利用者相互の距離は少し広い。

ケース4 広島駅南口広場西側

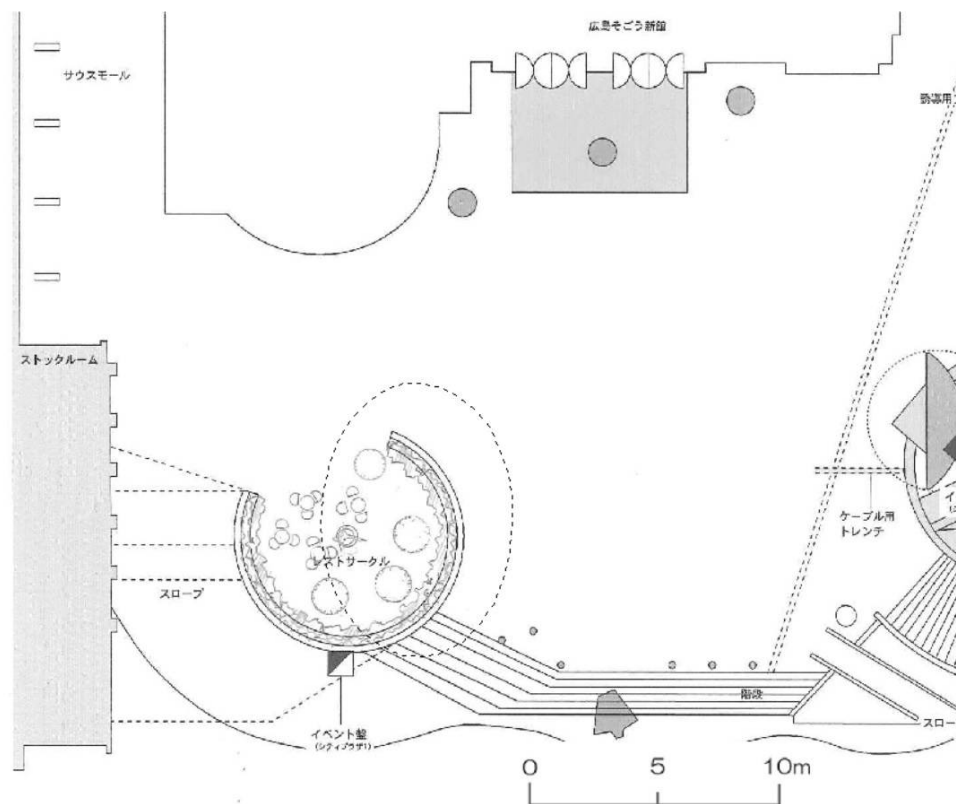


低木高木の植え込みの縁端を兼ねたコンクリート製のベンチで、座面は高め。両側は通行量の多い主要通路とバスターミナル、後方は植え込み、前方は4～5mの距離にコンビニの外壁。駅前の混雑に比較して少し死角になっていて、閉鎖的で裏的な印象があり落ち着きがある。個人利用者が印象としては多いが、目立った利用者の特徴はない。行為は、休息、飲食、スマホ、会話、喫煙（実は禁煙区域）と様々だが、待ち合わせ・列車時刻等の時間調整と思われる共通の休息行為が見られる。利用者相互の距離は少し狭い。

ケース5 基町クレドふれあい広場 レストサークル周囲

大型複合施設の広場内にある座れる場所。

花壇の縁端を兼ねたコンクリート製の円弧状ベンチ。座面高さは連続的に変化。周



囲を見渡せて、周りからも目立つので晴れやかな印象がある。正面に大型ビジョンがあり、平日は昼食後の休息をとる会社員が多い。禁煙区域であり、広場脇に喫煙所が設置されマナーが守られている。個人利用者が印象としては多く、高齢者が殆ど見られない。行為は、休息、飲食、スマホ、会話と様々だが、大型ビジョンや広場のイベントを

観るという共通の行為が見られる。利用者相互の距離は、込み合うと狭くなる。

要約

ケース1～5で観てきた＜街中ベンチのアフォーダンス＞を表に要約すると、以下のようになる。

＜街中ベンチのアフォーダンス＞

専有と共有	座れる場所の専有	座れる場所の共有	
		受容し譲り合う共有	居心地のいい共有
事例	みなと公園東屋 アリスガーデンD	グランドビル大手町休憩所兼喫煙所 グランドパーキング21休憩所兼喫煙所 アリスガーデンA, C 広島駅南口広場 基町クレドふれあい広場	アリスガーデンB OT屋
様相 (筆者主観)	一人しか座れない 仲間しか座れない	我慢しながら座る 緊張感を感じながら座る 譲り合いながら座る 思い思いに座る 楽しみながら座る	共に座る

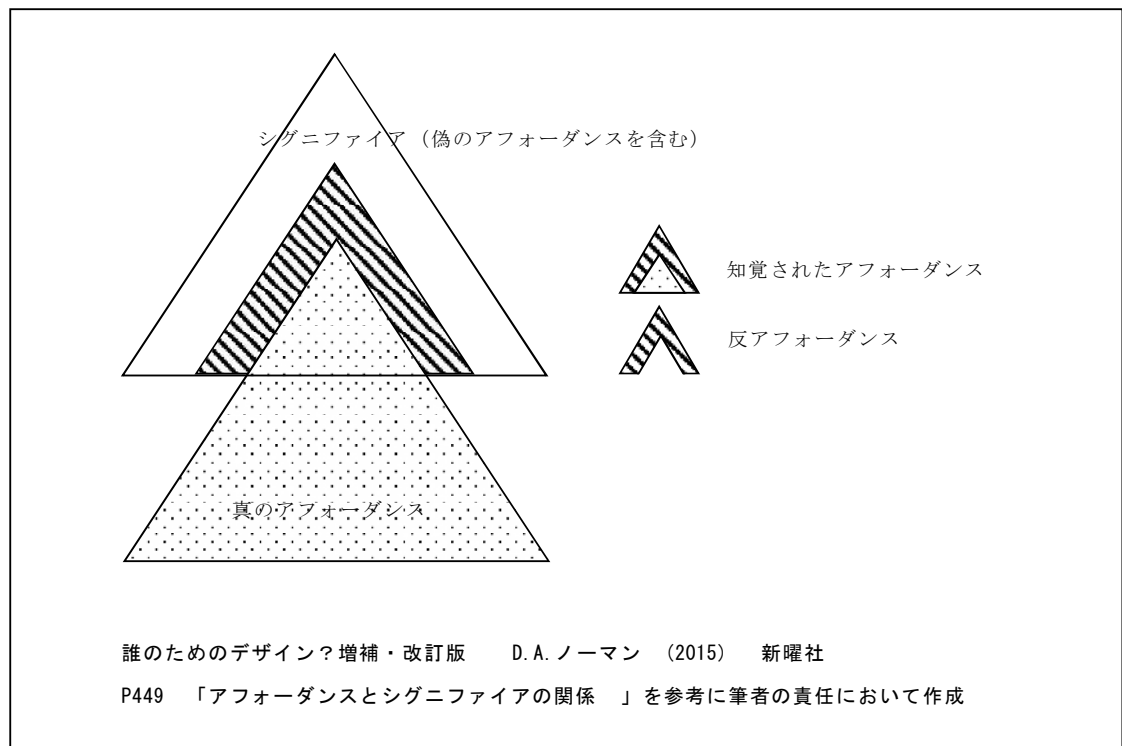
日常生活において人と環境がどのように関係をつくり出しているのか、街の中の＜一緒に座れる場所＞を数か所選んで観察してきた。その結果、〇〇をする場所、〇〇ができる場所、などのように座れる場所で行う（行える）特定の行為が利用者に共通に想起されるほど、「受容し譲り合う共有」「居心地のいい共有」が行われやすいのではないかと推測が得られた。特定の行為がそこで共通に認識されることで、お互いに場所を共有できる（してもいい）という共通感覚が生じるのではないかと。例えば競技場や劇場における自由席では、特定の行為（例えばサンフレッチェやカープの試合）が観客に共通に認識されているために、席を確保する時、空席状況、込み具合によって「受容し譲り合う共有」が行われている。

追記

D. A. ノーマンは、「誰のためのデザイン？増補・改訂版（2015）新曜社」の中で、アフォーダンスをデザイン分野で用いるために、知覚されたアフォーダンスをシグニファイア（Signifier）と呼んでいる。シグニファイアは、反アフォーダンス、偽のア

フォーダンス、誤解させるアフォーダンス（間違えさせるシグニファイア）を含む。

- 真のアフォーダンス：ギブソンの定義によるアフォーダンス、
- 偽のアフォーダンス：誤解させるアフォーダンス、
- 反アフォーダンス：真のアフォーダンスでないもの。「～しないことをアフォードする」アフォーダンス。



ギブソンの生態学的知覚論、ノーマンの認知科学的知覚論を応用すると、受容し譲り合い、居心地がいい、座れる場所を共有できる、というアフォーダンスの存在を示すためには、このベンチでの特定の行為が利用者に共通に想起できることをシグニファイ（指し示す）することではないかと考えている。

都市のインテリアでは、アフォーダンスが知覚されていることが大切になる。知覚されたアフォーダンス、つまり知覚可能な役に立つ・意味のある手掛かりであるシグニファイアが提供されなければならない。

どのようなシグニファイアを提供すべきかが都市のインテリアにおけるベンチの設置

計画にとって重要になる。

「ベンチを共有する」・・・街中のベンチという公（パブリック）空間と、個人・グループという私（プライベート）空間が共存・融合したかたちがそこにある。アフォーダンス理論とシグニファイア概念に基礎を置いて、分かりやすい都市のインテリアを目指してみたい。